

土の鶏頭山の繪が書いて有りまして、裏には新聞と曆とをあんかけに仕た様な小かい字が書いて有ります。詩とか五とか申しまして、見て解らん、聞いて解らん、教へて貰ふて解らん、生涯解らんと云ふ、甚い六ツケ敷いもんで、

「コリヤ〜許せ、萬屋金兵衛と申す旅籠は其の方か」

「ヘエ〜、萬屋金兵衛は手前の方で御座ります、有難うさんで」

「島の内河内屋太郎兵衛より差宿な致してくれた、一人でも泊てくれるか」

「ヘエ、有難うさんで」

「某は、紀州和歌山の藩にして、萬事世話九郎と申す者ぢや、其の方は何者ぢや」

「ヘエ、私は當家の若い者で」

「何、若い者と申すか、若い者に致しては少々頭が禿て居るな」

「是れは恐れ入ります、何歳何十になりましたも奉公致して居ります間は若い者で」

「成程、では頭の禿たお若い衆」

「是れは御丁寧な事で」

「其の方の名は何と申す」

「伊八と申します」

「ナニ其の方か、鶏の尻から血を吸ふのは」

「それは颯で、伊八と申します」

「伊八か、許してくれ、是れは僅少なれど取らす」

「有難うさんで、是れは旦那さんお茶代で」

「いや〜茶代ではない、其方に取らす、探つて見るでもよい中は金一分ぢや」

「是れは恐れ入ります」

「其の方に金一步遣したのは餘の儀にあらず、前夜は泉州岸の和田、岡部美濃守のお領分、浪花屋と申す間狭なる宿に泊り、有象無象も一緒に寝かし居つた、順禮が詠歌を唱へるやら、六部が念佛を上げるやら、相撲取りが齒切を咬むやら、驅落者が夜通しいちやく〜申して、一と目も寝さしおらん、今宵は何の様な間でもよいで閑靜なる間へ寝かしくれる様に」

「いや承知致しました、コレ、此の旦那さんを二階の八番の間へ御案内申せ」

其の後へお越になつたのが兵庫の若い衆三人連、お伊勢詣りの下向、三十石からお上陸りになりまして、若いので勢が違ひます、伊勢音頭を取りながら……

「オ——萬屋金兵衛は何處や……萬金は何處や——」

「ウワ——、甚い勢いやな……ヘエ〜萬屋金兵衛は手前で御座ります」